

## 久留間健先生記念号によせて

久留間健先生は、本学助手を経て1964年に経済学部専任講師に就任されて以来、1997年3月に定年退職されるまで、その教育および研究活動を通して本学ならびに経済学部の発展に大いに寄与されました。先生は、「国際金融論」および「貨幣論」の講義、さらにゼミナールを担当されて、多数の学生の教育にあられる一方、大学院での指導を通して研究者養成に多大な貢献を果たされました。また、1981年から1983年まで本学部経済学科長、1987年から89年まで本学経済学部長兼大学院経済研究科委員長、さらに1991年から1993年まで本学大学院経済学研究科博士課程後期課程主任を歴任され、経済学部および大学院の発展のために大いに尽くされました。

先生の研究業績に関しては、とりわけ以下の3点において、学界への大きな貢献があります。その第1は、先生の「前貸」理論がもたらした貢献です。それは、社会的再生産の見地から「流通手段の前貸」が「資本の前貸」とは概念上区別されるべきものとして措定しうることを初めて理論的に明らかにしたものであり、学界から高い評価を受けました。その意義は、先生の研究によって『資本論』の各所に散在するマルクスの関連する記述を首尾一貫した論理で把握することが初めて可能になったという、『資本論』解釈上のそれにはとどまりません。古くはイギリスの「通貨論争」また高度成長期にわが国で繰り広げられた「信用インフレ論争」、あるいはまたケインジアンとマネタリストとの間で今日も続けられている「マネーサプライ論争」など、実体経済と銀行貸出との関連をめぐる様々な論争的テーマに対しても、先生の「前貸」理論はその解明に十分な有効性を発揮し得るものとして注目されてきました。

その第2は、わが国のインフレーション理論の発展に対する貢献です。インフレーションに関する先生の一連の研究は「久留間インフレ論」と称され、学界の一つの潮流をなすものとして位置づけられてきました。それは、インフレーション発生の契機をなす「不換通貨の過剰」という概念を、紙幣の専一的流通という前提のもとで明確化し、その信用論段階への具体化を試み、さらにはインフレーションの波及プロセス（競争による法則貫徹の媒介過程）を含むより動的な「インフレ論」へと発展させていこうとする、上向体系を実践する息の長い研究であります。

第3には、国際通貨論の発展への貢献を挙げないわけにはいきません。ニクソン・ショックと呼ばれる「金・ドル交換停止」によって「金の裏付け」を失った不換通貨ドルが依然として「国際通貨」として機能している状況を経済学はどう説明すべきなのかという問題について、先生はその理論的解決を示されました。先生は、国境を越える個々の経済取引が最終的に「国家」という単位に統括されるメカニズムとその「未決済的性格」を提示されました。その後、

先生の見解は国際通貨論における代表的見解の一つとして、学界においても繰り返し取り上げられてきました。以上のような先生の研究者としての歩みは、経済学界のみならず、本学および本学部の学問的声価を高める上で多大の貢献をなすものであったといえます。このような本学と学界の発展へのご貢献を称えて、立教大学は1997年7月に先生に本学名誉教授の称号を贈りました。

経済学部は、先生のこれまでの研究教育上の大きな御成果と本学部への多大な御貢献を記念して、本号を久留間健教授記念号といたします。先生の、今後いっそうの御活躍と御健康を祈念いたします。

1997年11月

経済学部長 正田康行